



編集・発行 邑楽町役場企画課
〒370-0692 (住所記入不要)
☎ 0276-88-5111 (代表)
☎ 0276-47-5007 (企画課直通)
☎ 0276-89-0136
URL <http://www.town.ora.gunma.jp>
E-mail koho@town.ora.gunma.jp

邑楽町携帯サイト
2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。
携帯用URL <http://www.town.ora.gunma.jp/k>



〈第四十一回〉

若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けしますー。

あすへひとこと

「邑楽町の昔ばなし」より

邑楽町の地名あれこれ⑨



男の子が欲しい景継は富士山本宮の浅間大神をお願いをしました。その後、子・景春のために浅間神社（前原）を建てたと言われています。

猿楽（さるがく）

中野城主になった景継の奥方には男のお子さんがおりませんでした。中野家を継がせる男の子が欲しい景継は、日頃から崇拜していた駿河国（静岡県）富士山本宮である浅間大神に、弘安5年（1282）6月中旬から「神様どうか私に男の子をお授け下さい」と一生懸命お願いし続けました。

それから5年後の弘安10年6月13日のこと、不思議なことが起こりました。

それは、まったくにわかに、お城のやや南西の未申（ひつじさる）の方向から歌舞音曲が聞こえてきました。景継は、おかしなことがあるものだと思い早速、供の者たちに見てくるように言いつけました。家来たちは騒ぎの聞こえた所に行つて見て驚きました。そこには猿たちが集まつて、手拍子を取りながら、にぎやかに歌や踊りをして騒いでいるではありませんか。家来たちは早速、お城に帰つてその様子を殿様に報告しました。

それから間もなく奥方に男の子が生まれました。景継はもちろんのこと、一族の喜びはひとかたではありませんでした。「このおめでたは、浅間様のおかげである。あの騒ぎは猿が前祝いをしてくれたためかもしれない」とばかり景継は、

「これからは、そこを猿楽と名付ける」と言つたといわれ、今日でもそこを猿楽と呼んでいます。この猿楽の地名は、邑楽中学校のすぐ南西近くの山林内（諏訪原）に残っています。

鎌倉室町時代のころ、この付近に猿楽師がいたそうです。これらの者は、この近くの浅間神社または浅間寺、あるいは善正寺の雇い猿楽師ではなかったかといわれます。猿楽師はお祭りの時などに余興として、面白いおどけたまねをしたり、おかしなおしやべりをして土地の人たちを喜ばせたといわれます。いま土地の人々が「猿楽」と呼ぶ所は、その舞台ではなかったかといわれます。

猿楽とは、大昔は、こっけいな物まねや言葉芸だつたそうです。やがて、それはお祭りの夜などに余興として即席で演じられたらしいのです。寺や神社ではそうした芸能人を専属で持つていて、街頭で行いました。専属芸能人を猿楽法師といつたそうです。

源頼朝の時代のころからは、これが劇になつて能や狂言が生まれたようです。明治の始めころまでは能・狂言のことを猿楽と言つていたと伝えられています。始めは猿まねのような身ぶり手ぶりで口上なども面白おかしく述べたんでしょうね。

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より

ひとりごと From editors

▶3年前の今頃、私は病院のベッドの上にはいました。病気にかかって入院していたのです。命を落としてもおかしくないような重い病気でした。そのとき思いました。元気に生活できるのは決して当たり前ではないのだと。▶多くの人たちの支えがあって、後遺症もなく社会復帰を果たすことができました。でも、私は今でも思い出すのです。入院していたあの夜、聞こえてきた鈴虫の声を。同じ病室で入院していた人たちも黙って聞いていました。お互い明日を迎えられるか分からない立場。命のはかなさと、ありがたさをかみしめていました。▶秋の夜に鳴く鈴虫の声を聞くたびに、今こうして生きていることに感謝しているのです。(田中)



そばの里に
咲く
(狸塚地内)



Photo 広報担当者



この広報誌は、自然保護のため
植物油インキを使用しています。



この広報誌は、東日本大震災で被災した三菱
製紙のニューVマット紙を使用しています。